Twenty Four Life ～24時間の命～

HERON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｗｅｎｔｙ　Ｆｏｕｒ　Ｌｉｆｅ　～２４時間の命～

【Ｎコード】
Ｎ６５３２Ｄ

【作者名】
ＨＥＲＯＮ

【あらすじ】
一日に一人づつ人間がこの世から消えてゆく。一日の終わりであり始まりである２４時に、全国民に明日死ぬ人間のプロフィールがテレパシーのようなもので伝えられる。伝えられたものは次の２４時に姿が消え、この世からいなくなってしまう。この物語は、奇妙なテレパシーで死を宣告された、様々な人間の行動を描く物語である。

プロローグ（前書き）

この物語に話の繋がりはありません。言うならば、同じ世界で起こる短編集です。

プロローグ

一日に一人づつ人間がこの世から消えてゆく。
こんなことが数ヶ月前からこの国で当たり前のように発生しているのだ。

それはとても奇妙な話で、一日の終わりであり始まりである２４時に、全国民に明日死ぬ人間のプロフィールがテレパシーのようなもので伝えられる。当然。眠っている人間にもだ。

そのプロフィールはとても細やかで、苗字から名前。身長から体重。そして年齢。さらには、都市や町に限らず、住んでいる住所までテレパシーで伝えられる。

そして、テレパシーで伝えられた人間は、日付の変更と共にこの世から消える。

命が残り一日だと知った人間達は、様々な行動をとる。大切な人のために全力を尽くして思い出を残そうとする人もいれば、絶望して何もしない人も、自殺してしまう人だっている。
だが、どんな行動をとろうと、結局この世から消え去る。遺体すら残りはしない。

現在、国も総力を挙げて問題解決に努めているが、当然。解決などできやしない。
テレパシーを使い、人を消す。こんなことが出来る人間なんていやしないだろう。出来るとすれば神様？　悪魔？　そんなこと信じろといわれてもすんなり信じれるものじゃないし解決にもならない。

きっとまだこの問題は解決することはないのだろう。まだまだ人は一日に一人づつ消え続ける。

この物語は、そんな奇妙なテレパシーで死を宣告された、様々な人間の行動を描く物語である。

Ｌｉｆｅ１　悲しき恋

彼の名前は桜井耕作（さくらいこうさく）。高校二年生。彼には高校に入学してすぐに恋に落ちた先輩がいる。

その恋が初恋だった彼は、入学してからすぐに先輩に近づき、気に入ってもらうために様々な努力をした。一学期が終わる頃にはメールの交換もしたものだ。

それから一年。二人は、だいぶ仲も深まり、いい感じになっているのだが、まだ付き合ってはいない。

彼も告白しようと思ってはいるものの、後一歩が踏み出せない状況にある。

だが、そんな彼も思わぬ形で先輩に告白することになるのだ……

彼は、学校へ行き友達と喋り、授業は寝る。いつも同じような毎日だ。当然。友達と話している時も授業で寝ようとしている時も考えていることはずっと先輩のことばかり。それはもう、友達からも「たまに上の空になってるなお前」と言われるほどだ。

学校が終わった後。家に帰る道。帰った後。頭の中に鮮明に映るのは、いつも先輩のことだ。そしていつも心の中の自分に「明日こそは告白するぞ！」と言い聞かせる。まぁ、それはいつも叶わず終わるのであるが……

そして夜も更け２４時を迎えようとしている。彼は……いや、ほとんどの国民は揃って祈るように手を合わせるであろう。死を宣告されるあの時間がやってくるのだ。「俺の名前が……そして俺の知り合いの名前が呼ばれませんように」彼はそう祈る。だが、無常に

もテレパシーが伝える人間は彼であった。

彼は、自分の事だと分かった途端に呆然とした。そして、自分が明日消えると考えると涙が溢れた。

テレパシーの伝えが終えた瞬間。彼の携帯が、友人や知り合いのメールや電話で鳴り止まず、階段からは家族が駆け上がってきた。

家族は、涙を流し鼻水をたらしながら、大声で「どうして耕作なんだ……」「耕作…耕作」と唸っている。

そのとき、ようやく携帯の音は止まったが、彼はメールを返す気も家族に言葉を返そうとも思わなかった。逆に「一人にしてくれ！」と叫びたかったほどだ。だが、家族の気持ちを考えると、そんな事は言えるはずも無かった。

しばらくして、家族も彼の気持ちに気づいたのか涙を流しながら静かに部屋を出た。

急に静かになった部屋で、彼はぼんやりと携帯のメール着信をチェックしていた。その中には普段仲のいい友達や、メール交換をしたものの交換しただけでメールをしていない友達。みんなから様々な言葉が送られている。彼は、それを見て涙が止まる事はなかった。

そして、みんなの言葉を見ている途中、彼は先輩のメールを見つける。彼は、先輩の名前を見た途端、慌てて先輩から送られたメールを開いた。

先輩も皆と同じように自分を本気で心配してくれている。それは、メールの文章を読んでいるだけで伝わった。そして、これは後々気づいたことなのだが、電話の着信も五回以上あった。これだけ自分

を心配してくれているのに、このまま消えて……死んでいい訳がない。

彼は一つの決心を固めた。先輩に、自分が抱いている思いを全てぶつけようと……

彼は、そう心に決めた後も眠れるはずもなく朝を迎えた。そう。眠れるはずもない。この一日は自分の命そのものなのだから……

彼は、何か下が騒がしいと感じ階段を下りた。そこには彼と特に仲のよかった友達が彼に会いに来ていたのだ。

友達は彼に会いたがっていた。だが彼の家族が、まだ彼が精神的に落ち着いていないと思い、「耕作はまだ……」と友達を止めていたのだ。

だが、友達はそれでも彼に会いたがった。それほど会いたかったのだ。なので下が騒がしかったというわけだ。

彼が下に降りると、友達は「耕作！！」と叫んで、彼の家族を振り切り、彼に歩み寄る。

「出てきて大丈夫なのか耕作……？」

「あぁ。もう覚悟は決めた……」

それから会話が続くことはなく沈黙が続いた。すると突然、彼の友達が涙を流した。

「ごめん……ごめん耕作……耕作に言ってやれる励ましの言葉が見つからない……俺、何の助けにもなってやれねえよ」

彼は涙を流したまま床に膝を落とし、掠れたような声でそう言葉を発した。

その言葉に彼は、彼の家族は号泣した。彼の家に泣き声が広がる。端から見たら奇妙な声であるが彼らからしてみればこれほど悲しい泣き声はない。

その後も彼は様々な友達や教師、近所の人。色々な人から励ましの言葉をもらった。いや、励ましの言葉というより励ましの心だろう。みんな彼にかけてあげられる言葉が見つからなかった。

だが、彼はそれでも嬉しかった。沢山の励ましの心を受け取ったのだから。

しかし、励ましてくれた人達の中に先輩の姿はなかった。彼にはそれだけが気がかりだった。これでは先輩に思いを伝えることが出来ない。

しかし、先輩の家に直接行くのも気が重いと思った彼は、メールで「２３時に笹木野公園の前で待ってます」とメールを送った。

彼はメールを送った直後、家族に別れの挨拶を告げ、公園へ行き先輩を待った。

公園で待っている時間はいつもの何十倍も長く感じた。彼は今までの思い出を振り返りながら先輩を待つ。

思い出に浸るうちに、太陽が沈み、夕陽が見え始め、空がオレンジ色に染まる。毎日毎日見る夕日ではあるが、この日に限っては、今日でこの夕陽を見るのも最後かと、オレンジ色の空を眺め続けた。

そして夜も更け、夜空に輝く星を見て「この星を見るのも今日が最後か」と呟きながら時計を見ると、もう23時を5分も過ぎているではないか。だが、先輩はまだ来ていない。彼はそれでも待った。先輩が来ると信じて待った。

先輩を信じて15分。まだ先輩は現れない。彼も少し「これはこれで仕方ないかな」と思い始めたその時である。暗い暗闇の向こうから一つの人影が見えた。

人影は段々とこちらに近寄ってくる。近寄ってくるに連れて人影もくっきりと人として見えるようになってきた。そう。先輩だ。

彼は、人影が先輩だと分かると、心の中でホッと一息ついた。

「来てくれてありがとうございます」

彼はまず、軽く先輩に礼をした。そして、先輩の顔を見ると、泣きそうな顔を一生懸命こらえていた。彼には先輩のそんなところも愛おしく感じた。

「ごめん……私逃げてた。耕作がいなくなっちゃうなんて信じたくなくてさ。それならいっそもう会わなければなんて思っちゃったの……本当ごめんね」

先輩は涙をこらえきれずに流しながらそう言葉を発した。

「いえ。確かに俺もこのまま先輩に何も言えずにこの世を去るのは嫌だなぁって思いました。でも、先輩は今ここに来てくれてる。それだけで俺は嬉しいんです。だから、もう謝らないで下さい。先輩は何も悪くないです」

「うん。ありがとう……なんか私が励まされちゃってるね。本当は私が耕作を励まさないといけないのに」

彼は、ここで伝えるべきだと思った。自分が先輩に抱いている思いを……

「大丈夫です。俺が先輩をここに呼んだのは励ましてもらいたからじゃないんです。俺、入学した頃からずっと先輩に一目惚れしてました。俺、入学した頃、あんまお洒落とかもしてなかったでしょ？　でも、今はたまに先輩、俺のことお洒落だねとか言ってくれるじゃないですか？　これ、先輩のためなんですよ。お洒落とかあんま興味なかったけど、先輩にお洒落だねって言ってもらうのがたまらなく嬉しくて……」

ここで一回話を止め、深呼吸する。その間、先輩は何も言わず彼の眼を見つめ続けていた。

「俺、先輩が好きです。ずっとこれを伝えたかった」

その言葉を聞いた先輩は、一気に涙が溢れた。

「遅いよ耕作……遅すぎるよ。私も耕作が好きだった。話してて楽しいし、一緒にいてて居心地よかった。私もいつか耕作に告白しようと思ってたの。でも、後一歩踏み込む勇気が無かった……遅すぎだよ。私達……遅すぎたんだよ……」

彼は、彼女からそんな返答が返ってくるとは思わなかった。心の奥底では軽く流される程度だろうと覚悟を決めていたからだ。なので、いい意味で予想を裏切られた分、彼の中には倍の嬉しさと後悔が生まれていた。

「一緒ですね俺達……俺もそうです。踏み込めなかったんだ。怖くて、それで仲が壊れたらどうしようって……でも、俺は今、先輩から最高の返事を頂きました。ありがとうございます先輩。俺にとって最高の癒しです」

彼は精一杯の作り笑いで先輩に微笑みかけた。先輩も彼の気持ちにこたえようと精一杯の作り笑いを返した。

「ねぇ耕作。最後にキスしていい？」

突如。先輩が彼にそう問いかけた。彼は、先輩の急な問いかけに「なんでキスですか！？」と驚き、質問返しをした。

「最後に私と耕作が繋がっている証を作りたいの。そうすればまた、あの世で会えるかもしれないから」

先輩は、彼の返事を聞く前に自分の唇を彼の唇に合わせ、キスをした。時間はもう２３時５８分を過ぎた。後２分足らずで彼は消える。彼らはその２分の間。ずっとキスをした。

そして、２４時を過ぎる１０秒前。彼の実体が消えていくのが分かると、先輩は咄嗟に自分の唇を彼の唇から離した。

離した後、先輩は彼の顔を見た。彼は泣いていた。でも顔は笑っている。必死で笑い顔を作っているのだ。全ては先輩を安心させたいから……そして、彼は静かに消えた。

彼が消えた後、先輩は大声で泣いた。だが、そんなことはお構い無しに、頭の中には死の宣告を伝えるテレパシーの声が頭の中に流

れる。

先輩は初めて、次に流れる人物が自分だったらいいのになと思った。

だって、あの世にいけば耕作と会えるかもしれない。同じ方法で死ねばもしかすると……

Ｌｉｆｅ２　家出少女

４年前。ある少女が家出して行方不明になった事件があった。その少女はまだ発見されておらず、ちまたの噂ではもう死んでいるんじゃないかと言われていた。だが、その少女は生きていたのだ。それは、思わぬところから流れてきた確信的な情報。

そう。あのテレパシーである。あのテレパシーから少女の情報が流れたのだ。住所もしっかりと実家のものであったから間違いない。

この生存情報には流石に喜ぶ人はおらず、家族もみな嘆いた。

情報が流れたその時、少女は自分がどこにいるのかばれないように、実家から遠く離れた森の中にいた。

少女は太陽の光が嫌いだった。だから光を見ないようにずっと森の中にいた。実はこれが森の中で暮らしている一番の理由だったりする。

しかし、少女だって心がある。少女は死ぬ前に一度、外の光景を見たいと思ったのだ。

少女は、約４年ぶりに森から外に出た。当然。太陽の光がない夜にであるが……

星が輝く夜空の中を少女は歩く。

少女は、４年間も森の中で生活していた。なので、体中泥だらけで衣服もボロボロ。更に臭いもきつい。例えるならば本格的な獣の匂いである。

だが、「森の中に居たのにどうして？」と驚くくらい、少女が被る帽子は綺麗だった。少女は帽子がお気に入りなのだ。別に誰かに

貰ったからとかいう理由ではなく、嫌いな光を遮ってくれるから。ただこれだけの理由なのであるが。

そんな異様な人物を見たら、誰だって不気味に思うであろう。街歩く人は、みんな少女を避けて歩く。

そんな人からの視線や行動に、全く動じることなく歩いていた少女。

しかし、少女はある光景が目に入ると、歩いていた足を止め、その場所へと駆け寄った。

少女が目に入った光景は、一つ街灯が灯されただけの暗い公園で、ブランコに座っている少年。少女は、その少年が凄く気になったのだ。なんだか自分と同じ匂いがして……

「そこで何してるの？」

少年に駆け寄った少女は、真っ先にそう尋ねた。

少年は、突然声をかけられたので、ビクッとすると、座っていたブランコから立ち上がり、少女をジッと睨みつけた。

「姉ちゃん何者？　もしかして僕を連れ帰りに来た人？　そうなら僕帰らないよ。絶対に帰ってやるもんか！」

少年は、そう少女に吐き捨てるように言った。

「違うわ。私はただ君がなんでここにいるのか聞きたいだけなの」

少年は疑うような表情で、そう言った少女を見た。

「そう言う姉ちゃんはなんでこんなとこにいるのさ。顔も泥だらけだし、服もボロボロ。怪しすぎるよ」

「私？　なんて言ったらいいんだろう……あまりうまくは言えないけど、家出した人の成れの果てってところかな。恐らくだけど、君も家出してきたんでしょ？」

少女は、悩みながらもそう答えた。

「えっ！？　なんでわかったの？」

少年は驚きながら、そう言葉を返した。少女は、そんな少年を見てフフッと笑った。

「やっぱりそうなんだ。なんだかそんな気がしたんだ。でも、早くお家に帰ったほうがいいよ。君もまだ小さいんだから、親も心配してると思うし。探し回ってるかもよ？」

少女の言うとおり、少年はまだ幼かった。見た目的にも小学生高学年といった感じで、声もまだ高い。変声期もきていないのだろう。

「嫌だ！　帰りたくないよ……家へ帰ってもうるさい親がいるだけだし、学校へ行っても嫌な奴ばっかりで、楽しいことなんか一つもないもん！」

暗く静かな公園に、少年の思いが鳴り響いた。それを聞いた少女は、なんだか悲しそうな表情をしながら空を見上げた。

「同じね。私もそんなこと思ってたわ。もう何年前になるかわから

ないけど、１２歳の時に君と同じような感情になって家を飛び出したの。初めは楽しかったわ。親の財布からお金を盗んで、見たこともない遠い場所へ行ってね。でもね、それは初めだけだったの。時が流れるにつれ不安になってきた。だから、私は森に隠れて必死で生き延びてきたわ。そこで私は生きた動物も食べてきた。たまに、どうやって言葉を発するか忘れたりもしたわ。それくらい森にはなじんでいたの。でもね、私が森で一時も忘れず思ってたことってなんだか分かる？」

少女は空を見上げながら、悲しそうな口調で少年に問いかけた。

「寂しかったの？　姉ちゃんは、家に帰りたいと思ったの？」

少年も少女の問いかけに答えようと、自分が思ったことを思ったように話した。

少女は静かに首を縦に振った。

「でもね、もう帰れなくなるの。自分の心に整理がつかなくなるのよ。帰っても親は私のことを覚えてないんじゃないかってね。今じゃ、うるさかった親はもちろん、私を苛めていた学校の同級生だって恋しく思える。私は家出して楽になりたかったのに、今は苦しんでる。君も覚えておきなさい。本当に家出するっていうのは楽になれるんじゃなくて孤独になるだけ。だから家に帰りなさい。家に帰れば君を心配してくれている人がいるんだから」

少女は、少年の肩に手を乗せてそう言った。

そう言われた少年は、力強く「うん！」と言って答えを返した。

「ありがとう姉ちゃん。僕、家へ帰ります。姉ちゃんも、家へ帰ってあげなよ。家に帰れば姉ちゃんを心配してくれている人がいるん

だからさ」

少年は、少女に一つお辞儀をすると、家へ向けて走っていった。

公園に一人になった少女は、「家かぁ……もう遅いよねえ……今日だって最後に一目親の顔を見ようと外へ出たけどやっぱり駄目だった」と呟いた後、夜空を見上げて祈るように「あの世で家族と再会できますように」とお願いした。

そして、少女は消えた。

誰もいない街灯が一つ灯されただけの公園に残るものは、少女の切実な願いだけだった。

Ｌｉｆｅ３　君は白鳥

深夜１２時。テレパシーを受け取った人間は、みんな少なくともマイナスの感情になる。そのはずだった。しかし、ここにテレパシーを受け取り、嬉しさのあまり笑顔が込み上げている青年が一人……

その青年は引きこもりだった。ある理由で高校を中退して以来、もう数年間、ほとんど外に出ていない。

青年は、テレパシーを受け取った日の真っ昼間に、満面の笑みで自分の部屋の押入れの奥深くから隠しておいた大量の改造銃と改造爆弾を鞄の中に入れ、勢いよく外へ飛び出した。部屋に、「今日。僕はみにくいアヒルの子から白鳥になります」と書いた書置きを残して……

勢いよく外へ飛び出した青年が向かった先は、少し自分の家から離れた一軒家。

青年は一軒家の敷地に入り込み、一軒家の裏にあるガラスを割り、家の中へと進入した。

青年が中へ入った直後。家の人であろう人物がこちらへ向かってきているであろうバタバタと、慌てふためいた足音が聞こえた。

その足音を聞いた青年は鞄から改造銃を取り出し、ドアに向かって改造銃を構える。

そして、この家の人であろう誰かが部屋のドアを開けた瞬間、青年は改造銃を撃った。

撃たれた家の人であろう人物は、何者が何をしたのか脳が確認す

る前に息絶えた。当たり所が悪かったのだ。撃った本人は素人。狙って撃てるはずは無い。神は青年に微笑んだのだ。神は、どんな生物にも同じように味方する……

青年は、血を流し、ピクリとも動かない家の人であろう人物を見て、笑いを押し殺すように笑った。

青年に罪悪感などなかった。あるのは快感のみ。青年は思った。これほど楽しいことがあっていいものかと……

青年は殺害後、何かを探すように家中の部屋を探し回った。

青年が一階を探し終え、二階への階段を上る。そしてまた、同じように部屋を探していると、青年が急に立ち止まった。

立ち止まった青年は、部屋の前にかけてある札の名前を読み、また笑った。

部屋の中にいる人物は大音量で音楽を聴いているようで、部屋の外まで音が漏れている。これでは、さっきの騒動に気づかないのも無理はない。

青年は改造銃を構え、勢いよく部屋のドアを開けた。

部屋を開けたそこには、ヘッドフォンをつけ大音量で音楽を聴きながら読書している女性が一人。

女性は、部屋を開けた音には気づかなかっただろうが、背後に人の気配を感じて、バッと後ろに振り向いた。

改造銃を持った青年がいると確認した女性は、慌てて音楽を聴いていた機械を止めると、「誰！！」と叫んだ。

青年は、そんな女性をみてニタニタと笑っている。

「何が可笑しいの！？　笑っていられるのも今のうちよ。今すぐお母さんに警察を呼んでもらうんだから！」

あまりに突然。そして、あまりに得体の知れない気色悪い青年がニタニタと笑っている光景に内心、ビクビクしながらも、自分を鼓舞するように、青年を睨みつけながら大きな声で言葉を発する。

そんな言葉を吐かれても、青年はただただニタニタと笑みを浮かべている。

「ほ……本当に呼んでやるんだから！」

女性はそう言った直後、大声で「お母さん！」と叫んだ。だが、返事は無い。

「そうだったんだ。あれ、お母さんだったんだ」

青年は、微笑みながらそう言うと、女性が「どういうこと！」と言葉を返す。

「どういうこともこういうことも無いさ。お母さんはもうこの世にいない。でも、すぐに会えるよ。どういうことかというとね、理沙（りさ）という人間も殺さないといけないんだ。そうだよね理沙？」

青年は、改造銃を理沙に突きつけながら冷静にそう言い放った。

それを聞いた理沙は、流石に自分の許容範囲を超えたのか、恐怖でガタガタ震えだし涙も出てきた。しかし、このままじゃ駄目だと思い、許容範囲を超えても精一杯強がる。

「あんた、私達家族になんの恨みがあんのよ！　なんで私の名前知ってんのよ！　もしかしてストーカー！？　ふざけんじゃないわよ

！」

理沙がそう言った途端、青年はさっきまでのニタニタした不気味な笑みはどこへやら。とても冷たい、不機嫌な顔へ変貌した。

「僕のことなんて覚えてないよね。そうだよね。君みたいな学校のアイドルが……白鳥のように輝いていた君が……僕みたいな人間を覚えていろというほうが無理がある」

理沙は、青年が咄嗟に言葉を返してきたことに驚き、返す言葉に戸惑っている。

青年は、そんな理沙に構わず、また口を開いた。

「きっと君は大学でもモテモテなんだろうね。たくさんの友達が出来て、たくさんの男に告白されて、たくさんデートして、たくさんＳＥＸしてさ。２０歳過ぎて引きこもっている僕とは雲泥の差だ。でも、それも君のせい。覚えているかい？　僕が君に告白したときのこと」

そう。青年が引きこもった理由は理沙にあった。

青年は元々、高校で何人もの人に苛められていた。でも、青年は不登校になることなく学校に登校した。それは、理沙の存在があったからなのだ。

青年は理沙に惚れていた。惚れていたといっても顔や性格にではない。その人望にだ。

理沙は学校でも人気の女子で、男女共に人気があった。青年は理沙に憧れていた。いつか、理沙のようになりたいといつも思ってい

た。

そう思っている内に、青年は理沙自身を好きになっていた。

そして、青年は勇気を出して告白した。青年だって「はい」と言う返事をもらえるとなんて思ってはいなかった。それは正にその通り、青年は理沙に断られた。だが、理沙が普通に「ごめんなさい」と断っていれば、こんな事にはならなかったかもしれない……

理沙は青年に告白され、大きなショックを受けたようで、「醜い」「うざい」「あなたに告白されるなんて信じられない」と、青年を罵倒して断ったのだ。

ついには理沙が泣き出し、走り去ってしまうという最悪の結末。

これには青年もひどく傷つき、苛めから耐えるための支えが消えた青年は、次の日から学校に来なくなり、引きこもりになったのだ。

しかし、こんな出来事を理沙は覚えているはずはなかった。子どものように泣きわめきながら「そんなの知らないわよ！」と繰り返し叫んでいる。

その言葉を聞いた青年は、何か全てを諦めたように理沙に向けて静かに改造銃の引き金を引いた。

叫んでいた理沙の声はパタリと止み、床にドサッと倒れた。

青年は理沙から流れる血を少し手につけ、それを舐めた。

「僕と理沙。血の味は同じなのに、どうしてこんなに差がついたのだろう。まぁ、それももうどうでもいい話か」

青年は、フフッと笑うと、独り言のように喋り続けた。

「ねぇ理沙、聞こえるかい？　理沙は白鳥のように美しかった。でも、死んでしまったらもう同じ。羽をもがれた白鳥は飛べやしない。だから共にあの世で過ごそうよ。地で這いつくばってる僕を、飛びながら見下してた理沙も地に落ちたんだ。これで少しは理沙に近づけたよね？　そうだったら嬉しいな」

青年はそう言いながら、改造爆弾をセットした。

「でも、きっとあの世でも理沙は白鳥になるんだろうな。僕も、この世ではみにくいアヒルの子だったけど、あの世で白鳥になるんだ。そして、あの世で理沙と一緒に……」

青年が言葉を言い終える前に爆弾は爆発し、青年も理沙も塵となった。

青年がテレパシーを受けとって決意したこと。それは、青年を罵倒して振った理沙に復讐することではない。

青年は理沙の事を忘れることが出来なかった。青年はどうしても理沙と一緒になりたかった。

青年はテレパシーを受け取って、誰が見ても不気味で嫌気が起こる、こんな歪んだ行為を実現することを決意したのだ。

この事件は、歪んだ愛情をもった青年が起こした救いようの無い事件である……

Ｌｉｆｅ４　親父と息子

深夜１２時。テレパシーの悲しき被害者となったのは、ある大企業の社長。

この出来事に、深夜には社長に電話が鳴り響き、早朝から会社に全社員が集まった。

社員達はパニック状態で、跡継ぎ問題や、これからの方針で会議になり慌てていたものの、一つの結論がでた。これにはみんな泣く泣く賛成したのであるが……

会議を終えた後、マスコミが騒ぎ出してきたので社員達が全力で応対する。

社長が疲れた顔で社長室に帰ると、ポケットから携帯を取り出し、社長の一人息子にメールを送った。

社長には今年で２５歳になる息子が一人いる。息子は頭もよく、何でも器用に出来る息子だ。社長は息子を跡継ぎにすると、ずっと前から決めていた。しかし、そんな都合よく物事は進まない。

その一人息子は、社長である父を嫌っているのだ。それも無理のない話なのではあるが……

社長はいわゆる仕事人間。それが問題で息子が小さい頃に息子の母と離婚している。

お母さんっ子だった息子は、自分の都合で勝手に離婚した社長を恨んでいるのだ。

それからというもの、息子は社長と最低限のことしか話をしてい

ない。

それに息子は友達とバンドを組んでおり、音楽で食べていくつもりでいる。社長の跡を継ぐ気などさらさらない。

そうと分かっていながら社長は息子を呼んだのだ。迷っている時間などないのだから……

メールを送ってから15分程経ったとき、社長室に息子が入ってきた。

「外はマスコミでいっぱいだっただろ？　大丈夫だったか？」

社長は淡々とした口調で息子に語りかけた。

「なんとかな。それでなんだよ？」

息子は、社長をまるで汚いものを見ているかのような目で見ながら言葉を返した。

「あぁ……」

社長が話そうとしたところを息子が「ちょっとまて！」と言って止めた。そして、社長に問いかけたはずの息子が口を開いた。

「やっぱ言わなくていいわ。大体分かる。どうせあれだろ？　遺産やるから俺の跡を継げって事だろ？　違うか？」

息子は、「はぁ～」と一つため息をつきながらそう言った。

「前まではそう思っとったよ。でも、残念ながら外れだ。私はこの会社を売却することにした。そうすればみんな今まで通りの生活が出来る。お前だって会社の跡継ぎなど本望じゃないだろ？」

社長の意外な返事に息子は驚きを隠せない。しかし、強がる息子は「当たり前だろ！」と言葉を返す。

「だろうな。やはりこれでよかった。お前はお前の生きたいように生きればいい。お前は、社員と共に会社売却の話しを聞いて手続きさえしてくれれば、それからはもう自由だ。これが私の出来る最大の罪滅ぼしだ……」

社長は息子がなぜ自分の事が嫌いなのか気づいていた。社長は離婚して少し経ったとき、自分のしたことに悔いた。しかし、今さら言い出すことも出来ず、ズルズルと時だけが流れてしまったのだ。

そして今、社長は息子に精一杯の自由を与えるため、会社の売却を選んだのだ。

さっきまで社長に強く当たっていた息子だが、こればかりは言葉が止まってしまった。

そして、少しの沈黙が流れると、息子がまた一つ「はぁ～」とため息をついた。

「湿っぽい……あぁ、湿っぽい。こういう空気が一番嫌いなんだよな俺。なぁ、ちょっと1時間くらいそこで待ってろ。絶対戻ってくるから」

息子はそう言うと、社長室を出ようとした。しかし、それを社長が止めた。

「なんだよ？」

息子が社長を睨みつける。

「外にはマスコミがまだいるはずだ。だから……」

息子が、また社長の発言をさえぎる。

「分かってるよ。裏口だろ？　ここに来るときも裏口使った」

「そうか……」

息子は社長の驚いた顔を見て、少し自慢げな態度で社長室を出て行った。

1時間で戻ってくると言っていた息子だが、1時間30分を過ぎても帰ってこない。社長も、ちょくちょく腕時計で時間を確認するようになっていたそのとき、息子が帰ってきた。

しかし、息子はボロボロになって帰ってきた。顔にはアザや腫れができている。

これには社長も「どうしたんだその顔は！？」と息子を心配した。

「そんな驚くなよ。バンドを辞めるって言ったら、みんな怒り出してよ。少し時間掛かっちまった」

息子は、頭をかきながら面倒そうに社長に言葉を返した。

「お前……なんでバンドを辞めたんだ。音楽で生きていくんじゃなかったのか……？」

社長は、あまりのことに冷静さを失っていた。息子は、そんな社長を見て、またため息を1つつく。

「今日のあんた可笑しいねえ。やっぱ死ぬ前だから混乱してんのか？　状況見れば一発だろうが。事情が変わったんだよ。俺はバンドを辞めちまった。これで生きていく術は無い。だから俺が会社を継ぐよ。会社を売ろうなんて考えんな」

息子は照れくさそうに静かにそう言った。社長は「しかし……」と、まだ納得する様子は無い。

「何にせよ強情なとこは変わってやがらねえな。おい親父。あんたは俺に生きたいように生きろって言ったよな？　だから、生きたいように生きてんじゃねえか。あんたは、この会社の何代目だ？」

息子は、叱るような口調で社長に問いかけた。

「3代目だ……それよりお前、今、私のことを親父と……」

「そんなこと言ったっけか？　覚えてねえな。それよりも、3代目なんだろあんた？　ここで会社売っちまったら4代目から名前変わっちまうんだぜ？　それじゃなんかすっきりしない。だから俺が継ぐ。そんで、もっとでかい会社にしてやる」

息子が照れを隠すような表情でそう言う。社長は息子の言葉に返事を返せなかった。

そして、息子が社長のポケットから社長の携帯を取り出して番号を打ち、社長に渡した。

「でも条件がある。この番号に電話しろ。最後くらい喜ばせてやれよな。自分の本音ってやつをさらけだしてよ」

その番号は離婚した息子の母の番号であった。これには社長も戸惑ったが、息子の気持ちを無駄にしたくないと、意を決した。そして何よりも、社長の心には……

社長は手を震わせながら携帯の電話発信ボタンを押す。

プルルルルっという音が数回鳴り、ガチャという音が鳴る。

もうここからは社長と息子の母の世界だ。息子に入る余地は無い。

息子は、2人の会話をあまり聞こうとせず、ある準備を始めた。

息子が準備しているときに伝わってきた言葉、感情。「愛していた」「すまない」そして、瞳から綺麗に流れる涙。それは全て、話している2人にしか分からない本音の姿であった。

そして2人の時間が終わった。最後に泣きながらお別れを言った社長を見て息子が笑った。息子が社長の前で笑うのなんて何年振りかわからない。

「まぁ座れよ。きっと母さんも最後にいい思い出が出来たと思うぜ。あんたがした過ちによって傷ついた母さんの心も少しは救われたんじゃないか。気持ちっていう最高の回復魔法でな」

息子は照れながらそう言うと、社長と自分のグラスにビールを注いだ。

「本当にそう思うか……？　私は最低の父親だったんだなと今になって思うよ。すまんな」

社長は悲しそうな表情で息子に謝った。

「けっ。今ごろ遅いんだよ。とにかく飲もうや。こういう湿っぽい話は酒が入んないとやってらんないからな。少しは経営のノウハウも聞かないといけねえし。そんじゃ。乾杯」

「あっ、あぁ……乾杯」

2人はグラスとグラスをカチンと合わせ乾杯した。

それから2人は残りの時間ずっと語り合った。自分達を見つめなおし、営業のことについて語った。2人の本音と本音がぶつかりあった瞬間である。

親子2人でこれだけ語り合ったのは初めてのことであろう。そんな時間は過ぎるのが早く、あっという間に深夜12時前となった。

「もうこんな時間か……時とは流れるのが早いものだな……」

「だな。お別れの時間……きちまったみてえだな」

「最後に聞きたい。私はお前にとって、少しでも父親と呼べる存在だったか？」

息子は少しの沈黙の後、「そいつはあの世で教えてやるよ」と言った。

この答えに、少し驚いた顔を見せたものの、すぐに笑顔になった。ただし、この笑顔はみんなに見せる笑顔ではない。息子に見せる、

唯一の父親としての笑顔である。

「そうか。楽しみにしている。では、さらばだ息子よ。会社の経営は難しいと思うが、お前ならできると信じている」

時間は深夜１２時。社長の体が段々と消えていく。その姿を見て、息子は軽く舌打ちをした。

「あぁ湿っぽい！　やっぱあの世の件は無しだ！　アディオス　マイ　ファーザー！！」

息子がそう叫ぶと、社長はニコッと微笑み消えていった。

社長が消えると息子は窓を開けタバコを取り出し、月を見た。

「けっ。最後まで子どもに負の感情を与えながら死ぬんじゃねえよ馬鹿親父が……」

息子はそう言いながらライターを取り出しタバコに火をつけた。

「あ～あ。これから大変だぜ。経営の勉強して……その前に、髪の毛も服装も真面目にして転生しますってか。ばっきゃろう……」

息子が吐くタバコの煙には、静かに瞳から流れ落ちる涙が混ざっていた。

息子の涙が混ざったタバコの煙は、月に向かって静かに舞い上がっていった。

Ｌｉｆｅ５　世界を救う天使

現在、世の中で一番の大問題であろうこのテレパシー事件。国も総力を挙げてテレパシー問題を解決しようとしているが解決策はでない。

まず、何がどうしてこんなことになっているのかすらわからないのだ。手の打ちようがない。

しかし、そんな難解な事件を解決しようとしている一人の男がいた。

その男は人気のない町外れにひっそりと建っている民家に住む。男の日課は、資金調達のために町から離れたところでバイトをし、バイトが終わると自分の家で何かを製作する。バイトがない日は人の多い町の中心部で何かを呼びかけている。ずっとこれの繰り返し。

呼びかけも評判は悪く、町の市民が、呼びかけに来る男に罵声を浴びせるなんて珍しいことではない。

時々、うるさいという理由で殴られることだってある。町から離れたところでバイトをしているのもこれが原因だ。この町での男の評判は最悪と言える。

しかし男は呼びかけを辞めなかった。そのおかげなのかは分からないが、男の呼びかけに興味を示す人物が現れた。

その人物は一人の若い女性で、その女性が男に声をかけた。

「すいません。あなたが呼びかけている内容に興味があるんですが、詳しく教えていただけませんか？」

女性の問いかけに呼びかけの声をとめた男は、少しの沈黙の後、大声で「本当ですか！？」と叫んだ。この声にもうるさいと感じた町の人々からの罵声がとんだ。

「ここじゃちょっとまずいんで僕の家で話しますよ！」

男は、ウキウキ気分で自分の家の方向へ歩き出した。しかし、女性は男についていこうとする気配がない。どうやら家という単語がひっかかっているようだ。

それに気づいた男は慌てて誤解を解こうとする。

「そんな心配しなくても大丈夫です。そういう気はまったくないんで。それに、そういう事が目的で呼びかけやってたら、罵声に耐えてなんていけるはずないじゃないですかぁ」

男は、アタフタしながら女性の誤解を解こうとした。これには女性も、プッと吹き出し、「あはは。わかった。信じる」と言って男についていった。

家へ向かう途中、男は女性に対し、気になったことを質問した。

「どうして僕の呼びかけに答えてくれたんですか？」

ストレートな男の質問に対し、女性はさも当たり前かのようにニッコリとした笑顔で答える。

「だって、凄く一生懸命なのが伝わってきたんだもん。本気で何かしようと思ってないとあそこまで一生懸命にはなれないよ。だから声をかけたの」

「そうですか。野暮な質問失礼しました！」

女性の返答に対し、男はとても嬉しそうな声色でそう答えた。

こんないい人と巡り合えた。男はこの偶然に感謝した。

男は、女性を家の中に入れると、まずはいつも製作している何かの設計図を見せた。

その設計図を見てみると何かの機械のようで、複雑な構図が書かれている。

その機械の設計図を見て、思わず女性は「これは何の機械なの？」と聞いた。

「これは、ひねもすで苦しむ人達を救うための機械なんです。機械の中から現れる天使が救ってくれるんだ」

ひねもすとはテレパシーのことで、ひねもすの元々の意味は終日と読み、一日中という意味。言い換えると朝から晩まで。つまり一日の命ということで、男はテレパシーの事をひねもすと呼んでいる。

女性が「天使が現れるってどういうこと？」と質問したのに対し、男は楽しそうに話を始めた。

正直、男の話す話は奇妙で理解に苦しむ話だった。

機械の中から天使が現れる……普通では考えられない話だ。しかし男は大真面目。話を聞くと、その機械にたくさんの人が「ひねもすから救われたい」と思いを念じると、機械から天使が現れ、ひねもすから人々を救ってくれるというのだ。

男は、こんな奇妙な話を熱心に語った。女性も嫌がる様子も無く熱心に男の話を聞いた。そして、女性は一つの疑問を男にぶつけた。

「なんで人を救おうとするの？　あんなに罵声を浴びせられてるのに……」

「確かに今は罵声を浴びせられています。でも、人々がひねもすで苦しんでいるのは確か。今はなんと言われようと、僕が作った機械でひねもすを消すことが出来ればきっと罵声はやみます。そして、人々の苦しみを消すことが出来ます。僕はただ苦しんでいる人々を救いたいだけ。ただそれだけです」

男は当然と言った顔でそう言った。それを聞いた女性は、スッと男に対して手を伸ばした。

「うん。あなたはいい人だ。私の名前は望（のぞみ）。私が機械に思いを念じる第一号になる。あなたの名前は？」

男は、目をウルウルさせながら望の手を握り、「僕の名前は堅二（けんじ）！　ありがとう。生きててよかったぁ！」と言った。

それからしばらく二人は一緒に行動を共にした。堅二が望に機械の製作のノウハウを教え、望も段々と機械を製作できるようになっていった。

二人で一緒に思いを念じてくれる人を探すための呼びかけもおこなったりもした。当然、罵声を浴びせられまくりなわけだが……

堅二は、自分と一緒に罵声を浴びせられている望を気づかい小声で語りかけた。

「ごめんね。こんな罵声浴びせられることになっちゃって……嫌ならいつでもやめていいからね？」

堅二が望に、神妙にそう語りかけると、望が堅二をキッと睨んだ。

「何言ってんの！　人を救えば罵声はやむんでしょ！　こんな罵声へっちゃらよ。私だってこんなビクビクする日常嫌だもん。人々を救いたいもん！」

その言葉を聞いて、堅二は、「ごめん。僕が悪かった」と謝りながらも少し笑顔で謝った。

だが、こんなことをずっと続けていられるほど世界は甘くなかった。ひねもすが無常にも堅二の名前を伝えたのだ。

ひねもすが頭の中で流れている間、望は泣き続けた。わんわん泣いた。そして、堅二はというと……

「泣くな！」

堅二が叫んだ。望はビクッとなり、わんわん泣いていた声が止まった。

「君は泣いちゃ駄目だ。君はまだ人々を救える。僕には出来なかったけど君には出来るんだ。そして何より、僕は君の涙を見たくない。さぁ、今日も呼びかけに行こう」

望は静かに頷いた。そして堅二は同じように呼びかけた。望は悲しみからか、あまり声が出なかった。

二人で行う最後の呼びかけ。賢二の名前をひねもすが伝えたとしても、人々は罵声がやめなかった。むしろ、「この期に及んでまだ続けるのか！」と、罵声のネタが増えただけであった。

望は流石に反論しようとしたが、それを賢二が制止する。ここで反論してはもう希望はない。それが賢二には分かっているから。そして、それが望に伝わったから、二人はいつものように呼びかけを続けた。

そして一日が過ぎ、堅二が消えた。賢二が消える時も望は泣かなかった。グッとこらえた。そして消えた後も、望みはまだ涙があふれるくらいに泣きたかったが、泣くのをグッとこらえた。人々を救おうとしてる人間が泣いている場合ではないのだから……

望は一人になっても呼びかけをやめなかった。『ひねもすを阻止するためにご協力ください！』という看板を持ってずっと呼びかけていた。資金を稼ぐためにバイトも始めた。

人々の罵声はやむことはない。しかし、たまにいい人だっている。

望もビックリするほどの大金を寄付してくれた人がいたのだ。

これでバイトを辞め、製作に専念することができる。望は喜んだ。

望は今も製作を続けている。堅二が設計したこの機械から現れる天使がひねもすを阻止してくれることを信じて。いや、阻止してくれるだろう。あれだけ人々を救うことに熱心だった堅二が設計した機械なのだから……

Ｌｉｆｅ６　ロイヤル・ストレート・フラッシュ

今回、ひねもすの被害にあったのは年もまだ２０歳くらいの若い男。

彼は大富豪の家の次男。仕事はおろかバイトもしたことがない。というかする必要が無いのだ。親馬鹿の父が毎月お金をたくさん次男の家の金庫に入れてくれるのだから。

だが彼は金庫の中にあるお金を使おうとはしない。彼は生まれてこのかた何かに熱中したことが無い。しいて言えば、新聞を読むこと、毎日行っているポーカー占いくらいだ。

昔から親は彼に色々な物を与えていた。子どもの頃は、ゲーム。漫画。レゴブロック。人形……ｅｔｃ。大人になっても、車やバイクを買ってもらっていた。

しかし彼は興味を示さない。

人と関わることも嫌い、学校では一人も友達が出来なかった。かといって苛められていたわけでもなく、学校では空気のような存在だったのだ。

そんな彼なのだから、ひねもすの被害にあったからといって動じることは無かった。

彼は、人なんていくら長生きしても１００数年しか生きられない生物だと割り切っており、それが少し早いだけという考えしかないのだから動じることが無いのは当たり前とも言えるが……

彼はいつもしていることと同じく、朝刊を手に取り新聞を読み始めた。

これも事件が気になるから新聞を読むのではなく、少し目を使おうとしているだけである。しかし今日はいつもと違い、気になる記事を見つけた。

『一人の女性が謎のテレパシー（ひねもす）を止めるため町で呼びかけ』

「機械から現れる天使がテレパシーから人々を救う……馬鹿げた話だが面白い話だな」

彼は、その記事の内容に生まれて初めて興味というものを示した。小さな記事であったが、彼には一面記事の数倍も大きな話だと思えた。

彼は死ぬ前に、その女性に自分の金庫にあるお金を全て寄付しようと考えた。

彼は早速お金を詰めたトランクを持って、女性が呼びかけをおこなっている町へ向かった。

彼は女性を見つけたが、それよりも女性の周りで罵声を浴びせている人間達が目に入った。

「こんなんだから人間は嫌いだ。どんな馬鹿げた話でも少しでも救われる可能性がある。そんないい話を自ら断ち切ろうと考える。馬鹿な生物め。ある意味このテレパシーは消えないほうがいいかもしれないな。馬鹿は消えたほうがいい」

彼は、そう呟くと、呼びかけをおこなっている女性に近づきトランクに詰めた大量の金を女性に渡した。

「寄付しに来た。役立ててくれ」

トランクを開けると大量の金が詰まっている。女性も、そんな大量の金を簡単にもらえるわけがない。

「駄目です。私は寄付とかそういう目的で呼びかけをおこなっているわけじゃないんです」

女性は受け取りを拒否した。

「いいじゃないか。別に損するものでもないんだ。役立つのは確かだろ？」

女性は返す言葉が見つからず、小さな声で「そうですけど……」と言った。

「だろ。だから快く受け取っときな。応援してっからさ」

彼は、そう言うとその場を立ち去ろうとした。しかし、女性が立ち去ろうとする彼を止めた。

「ちょっと待ってください！　応援してくれるなら一緒に呼びかけやりませんか？　人がたくさん必要なんです！」

女性が必死で彼を呼びかける。彼は後ろを振り向き、少し笑いながら言葉を返す。

「それが出来ればいいんだが、残念ながら俺は死ぬんだ。あんたが止めようとしてるテレパシー……いや、ひねもすによってな」

女性はそれを聞き「あっ……ごめんなさい……」と言うと、なんだか悪い事を聞いてしまったという表情になり、それ以上、彼に語りかけることは無かった。

彼は、フッと笑い、その場を立ち去った。

「さっきは馬鹿なんて消えたほうがいいと思ったが、馬鹿にも美しい馬鹿はいるものだな。そいつらは生き残るべきだ。そいつらに賭けてみるのも悪くは無い……か」

彼は、そう呟くと、ポケットからトランプを取り出しシャッフルを始めた。これは、いつものポーカー占いをするつもりである。

ポーカー占いとは単純なもので、シャッフルしたカードを上から5枚引き、出る役の強さによって運勢を決めるというものである。

彼はシャッフルしたカードの上からカードを5枚引いた。

引いたカードを見た途端に彼は爆笑した。恐らく人生で初めての爆笑であろう。町を歩く人も彼を見た。

そう。彼はあの役を引き当ててしまったのだ。

『10』『J』『Q』『K』『A』『ALL』『BLACK』『SPADE』

ロイヤル・ストレート・フラッシュを……一度も札を変えずにロ

イヤル・ストレート・フラッシュになる確率は１／６４９７４０。これはもう笑うしかない。

「あっはっは。なんだこれは！？　おい神よ。俺が生まれて初めていい事をしたからこうなったのか？　それともあの世で俺に幸運がおとずれるのか！？　あっはっは。最後に笑って死ねるんだ。満足して死ねるってのはこの事を言うのかもな！」

彼は大声でそう言うと、笑いながらどこかへ歩いていった。そして笑いながら消えた。

あまり感情を表にださなかった彼が、最後の最後に笑うという感情を表にだした。

Ｌｉｆｅ７　交信男

宇宙人。この存在を信じている人はどれくらいいるだろうか。
もし、「宇宙人と交信できる」なんて言う人がいて、その言葉を信じる人はいるだろうか。

そのどちらにしても、ここに一人、「宇宙人と交信できる」という男がいるのだ。

その男は、別に変な人というわけでもなく、いつもは普通に友達と喋ったりスポーツなどをして遊ぶ男だ。
しかしその男は、余程重大な事が無いとき以外、授業中でも友達と遊んでいるときでも、突然どこかに行ってしまうことがある。
まぁ、大体の人は、「何かあるんだ変な奴」と流すところだが、人間にはたまに好奇心旺盛な奴がいて、後をつけるなんてよくよく考えれば危険な行動をとるやつがいる。

そしてここに、その行動を変だと思い、男の後をつける友達が一人。
男にばれないように後をつけると、空をジッと見て、周りに誰もいないのに男は誰かと話をしている。

それはとても可笑しな光景である。いつも一緒につるんでいる友達が、こんな人気のないところで空を見上げながら身振り手振りを使いながら楽しそうに会話をしているのだ。しかも、演技っぽいならただの変な奴で済ませることが出来るのだが、明らかに自然体なのである。友達にも、男が何か別の生物と会話している図が錯覚だとしても眼に見えた。

だが、驚いている場合ではない。友達は、男の会話が終わったのを見計らい、男に向かって叫んだ。

「さっき何してたんだ！？」

男はビクッとして声のする方向へ振り返った。

そして、その声の主が友達だと分かると、安心はしたのか、ホッと胸をなでおろし言葉を返す。

「なんでお前がここにいるんだよ！」

男は友達に向かって叫び返した。

友達は男に近寄り、さらに言葉を返す。

「好奇心以外の何物でもねえよ！　まぁ、ここまで見られたんだ。白状しなさい」

友達がそう言うと、男も仕方ないと言った表情で話し始めた。

「どうせ信じないと思うけどさ。宇宙人と話してたんだよ」

男がそう言うと、友達は少しの間ポカーンとした後、潤んだ目で男の目を見ると、男の肩にポンと手を乗せた。

「なぁ。それはギャグか？　それとも病んでんのか？　いい病院紹介するぞ」

友達が本気でそう言ってくるので、男は、そっと友達が乗せている手を肩から降ろした後、一つため息をついた。

「やっぱこうなると思ったよ……無理も無いけどさ。よく考えてみろよ。俺達もまとめてみれば宇宙人なんだぜ？　俺達が住んでる地球以外に生物がいたっておかしい話ではないだろ？」

男が必死に説明する。しかし、友達に納得する様子は無い。

「じゃあ、宇宙人と喋ってるとこ見してくれよぉ」

「見てただろ今……」

「いやいや、宇宙人となんてまさか思わないからよ」

「はぁ……まぁ、今は無理なんだわ。宇宙人からの交信電波を受信しないとな。まぁ、いつか見せてやるよ」

このとき、友達は本当に男は病気なんじゃないかと思ったという。しかし、男がひねもすの被害にあった日。あれは病気なんかじゃなかったということが分かったのだ……

男がひねもすの被害にあった日。家族や友達はもちろん、学校の先生や近所の人たちまで集まった。というより男が集めれるだけ集めてくれと家族や友達にお願いしたのだ。

当然。家族や友達は人を集めた。そのおかげで学校の先生や近所の人まで集まったのだ。

「皆さんに集まってもらったのは他でもありません。最後に宇宙人からの言葉を聞いてもらいたいのです。皆さんは、俺が宇宙人と話せるわけなんかないと思ってることだろうと思います。だけど俺の最後のわがままだと思って聞いてください」

突然の男の言葉。いきなり宇宙人からの言葉と言われても、その事実を知っているのは好奇心旺盛な友達一人のみ。全く意味のわからない話である。だが、集まった人々は文句１つ言わない。ひねもすの被害にあっているのにも関わらず、人を集めるだけ集めてふざけるはずはないと思ったからだ。

男は何も喋らず宇宙人からの交信電波を待った。

しばらくして男がスッと立ち上がると、バッと空を見上げた。

男が宇宙人との交信を始めたのだ。

男が宇宙人と交信をしている姿は誰が見ても驚くだろう。話している言葉が分からないのだ。しかし、ちゃんとした言葉のようで、何回か同じ言葉が聞こえてくる。

交信しているときの男は本当に誰かと話しているときのように表情豊かだ。自然な表情をしている。

そして男の交信が終わると、みんなの方を向き、真剣な顔つきで話しかけた。

その話の内容は驚くことばかりだった。町でひねもすを止めるため町で呼びかけを行っている女性のこと。機械から現れる天使で世界が救われること。天使が現れる条件は、人々の思いを念じること……

男が知るはずも無い話を男はみんなに話した。聞かされた話も現実味がないものではあるが、何か真実味がある。これにはみんなも宇宙人との交信を信じるしかない。

「皆さん！　今から町に向かって機械に思いを念じてきてください。宇宙人が言うことだ。これで間違いなく救われます」

男がそう言うと、みんなはザワザワし始める。これもまぁ仕方の無いことで、いくら男が宇宙人と話せるとしても、真実味があるとしても、機械から天使が現れるなんて普通に考えてありえない。真実味よりも現実味の無さが全面にでる。普通に考えてありえない事を信じる人はそういない。

しかし、こうして必死に言われると迷ってしまうものだ。

「機械の中から天使が現れるなんて馬鹿げた話だって思う人がほとんどだと思います。でも、馬鹿げた話は時々奇跡を生みます。俺だって始めは宇宙人と交信できるなんて馬鹿らしい話だと思ってました。でも、実際できているんです！　これは俺の最後の願いです。町へ向かってください。これで国が救われるかもしれないんです。国を救おうと頑張っている人だっている。このまま何もしないで終わるより、少ない可能性に賭けてみることのほうが素敵なことだと思いませんか？」

男の言葉には真剣味があった。芯があるように感じた。現実味のない話を男の気持ちが真実味のある話に変える。実際、この言葉にみんなの心は動いた。みんなは町へ向かって動き始める。

男も一緒に行こうと誘われたが、最後は自分の家で終わりを迎えたいということで一緒には行かず、自分の家で一生を終えた。

ＥｎｄＬｉｆｅ　天使とひねもすと人々と……

町に着いた人々は町中を探し回り、ついに呼びかけを行っている女性を見つける。

女性を見つけた人々が見た光景は、町の住民達に罵倒されながらも声を張って呼びかけを行う女性の姿だった。

人々は、すぐに罵倒している住民達を止めにかかった。人々はこの光景を見ていられなかったのだ。女性の呼びかけている内容もろくに聞こうとせず、誰かが罵倒しているから便乗しようという、住民達の醜い姿をこれ以上見てはいられなかった。

もしかすると真剣な気持ちで罵倒しているのかもしれない。しかし、人々にはどう見ても面白半分に罵倒しているようにしか見えなかったのだ……

人々が止めにかかっても、住民達は反抗するばかりで埒が明かない。人間同士の怒りと怒りのぶつけ合いで重い空気が流れているその時である。「いい加減にしろよ！！」という、重い空気や怒りの怒号を貫くほどの大きな叫び声が聞こえてきた。

声を上げたのは、宇宙人と交信が出来る男の友達。あの時、男が宇宙人と交信しているところを追跡して目撃したあの友達である。

「あんたたちさっきから何してんだよ！　罵倒なんかして得することあんのかよ？　わーわー叫んでたらこのテレパシーから救われんのかよ？　多分、この女性が呼びかけてる内容もろくに知らないんだろうな。馬鹿じゃないの」

これには流石に住民達も黙った。そして、また友達が口を開く。

「こっちもこっちだよ。俺達はこの女性の応援に来たんだろ？　なんで喧嘩してんだよ。更に迷惑になってるだけじゃん。みんないい大人なんだから冷静にならなきゃ。さぁ。黙って話を聞こう。そうじゃなきゃいつまでたっても天使は現れない」

言いたいことを言った友達は、息を荒くしながらもとりあえず落ち着き、人々の下へ戻っていこうとした。しかし、それを呼びかけを行っている女性が呼び止める。

「すいません……どうして天使の事を知っているのですか？」

呼び止められた友達は女性の方を振り向き、笑顔で言葉を返す。

「やっぱ気になる？　とっても不思議な話でさ。俺の友達に宇宙人と交信できるって男がいたんだよ。今はもう、テレパシーの手によって死んじゃったんだけど……そいつがさ、死ぬ前に俺達の前で宇宙人と交信したんだ。そしたら機械が現れる天使とか、俺達が知るはずも無い話を話しだしたんだよ。ビックリでしょ？　俺も初めは宇宙人と交信できるなんて信じてなかった。なんせ病気だと思ってたし。でも、あいつは本当に出来たんだ。ありえないってのは俺達が勝手に決め付けてるだけで、真相は蓋を開けてみないと分からないんだよね。だから俺達はあなたの応援に来たんだ。口だけじゃなくて体を張ってテレパシーから人を救おうとしているあなたをね。だから、今ここで機械の話してさ、罵倒してるみんなに分からせてやってよ。今からやろうとしていることがどれだけ重要なのかさ」

友達は、ニコッしながらそう言うと、人々の下へと帰っていった。

女性はみんなに説明した。一つ一つ分かりやすく丁寧に。そして

心を込めて。みんなは黙ってそれを聞いている。罵倒していた人の中にも頷いている人がいた。

心を込めた言葉には魂が篭る。どれだけいい言葉でも魂が篭っていなければいい言葉には聞こえない。しかし、どんな言葉でも魂が篭っていれば心に響いてくるものだ。

魂は言葉でも表情でも分かるものではない。魂が篭っている言葉は心に直接響くのだ。あれこれ言葉を解釈して響くのではなく、そのままの言葉で……

罵倒していた人達も、女性が話し終わった時には、既に罵倒の声など上がらず、応援の声が上がっていた。

それは、女性の話し方が上手かったとかそういうのではない。女性が話す説明には魂が篭っていた。ただ、それだけのことなのだ。

この瞬間から、あのいがみ合ってばかりの近寄りがたい町ではなく、一体感のある、親しみやすい町に生まれ変わった。

ついさっきまで怒号が飛び交っていた空間が嘘のように、その日から全員が一丸となって機械の製作に取り組んだ。やはり、人手が多いと作業もはかどり、一心不乱に作業に打ち込み、機械は出来あがった。

町中で、機械が完成した事への喜びの声が上がった。

だが、まだ人々が救われたわけではないので素直には喜べない。人々は緊張した顔つきで機械を地面に置き、祈るようにして機械に思いを念じた。

すると、思いを念じられた機械がコトコトと動き出し、光りを帯び始める。しばらくすると、光を帯びた機械から一筋の光が空へ放

たれた。

そこに現れたのは、天使ではなく光を帯びたキラキラと輝くものだった。

その、キラキラと輝くものが空一面に広がる。

「すげぇ……これが天使か……あいつの言ってた通りだ……世界……いや、きっと宇宙最強の超能力者を味方にしてたんだなあいつ」

「堅二見てる……？　でてきたよ天使。堅二は一つも間違ったこと言って無かったよ……人々を救えたよ。堅二の設計した機械で……人々……救えたよ」

それは天使ではなかった。しかし、人々の目にはそれが天使に見えたのだ。そして、ひねもすから救われたと直感した。

案の定、その日を境にひねもすは無くなり、ひねもすの恐怖は幕を閉じた。

ＥｎｄＬｉｆｅ　天使とひねもすと人々と……（後書き）

これでこの作品は完結です。読んでくださった方に感謝します。

この作品はもともと、知る人ぞ知る、筋肉少女帯の機械という曲を聴いて思いつきました（Ｌｉｆｅ５なんてパクリといわれても仕方が無い）

では、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6532d/

Twenty Four Life ～24時間の命～

2011年5月14日16時29分発行